

## チーム学校概念の現場への浸透

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川上, 正浩, 山田, 理英 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4593">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4593</a>

## チーム学校概念の現場への浸透

川上 正浩・山田 理英

臨床心理学専攻教授 ・ 臨床心理学専攻2回生

### 要約

平成27年の文部科学省中央教育審議会答申において「チーム学校」という概念が提示されたが、現状としての「チーム学校」が、文部科学省の期待に十全に応えるものであるのかについては、まだまだ疑問も残る。本研究では、現在の中学校において、チーム学校としての運営について、教員の意識を中心に検討した。特に、臨床心理士であるスクールカウンセラーのワークショップの前後における教員の意識の変化に焦点を当て、現状を明らかにすると同時にその変容を促す取り組みについても検討を加えた。中学校教員17名を対象とした質問紙調査の結果、教員は、チーム学校について、言葉としては知っているが、その概念についてはあまり知らないと感じていること、概してスクールソーシャルワーカーに対するよりスクールカウンセラーに対する役割知識や依頼経験が高いことが示される一方、支援希望に対しては、スクールソーシャルワーカーとスクールカウンセラーとでそれほど差異が認められないことが示された。今回、第二著者が行った研修会は、全体的なコンサルテーションに当たるものであると考えられ、事後調査より、チーム学校が機能していくためには、こうした取り組みも有効であると考えられた。

**キーワード：**教員の意識、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、ワークショップ

### 問題と目的

平成27年12月21日に文部科学省中央教育審議会答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策」で提示された「チーム学校」という概念（文部科学省中央教育審議会，2015）は、学校の教職員等がそれぞれの専門的な知識または技能を活用しつつ、チームとして連携し、協働して学校運営を行う、というものである。答申には以下のように述べられている。すなわち、「子供（ママ）たちが今後、変化の激しい社会の中で生きていくためには、時代の変化に対応して、子供（ママ）たちに様々な力を身に付けさせることが求められて」いる。「社会や経済の変化に伴い、生徒指導や特別支援教育等に関わる課題が、複雑化、多様化しており、学校や教員だけでは、十分に解

決できない課題も増えている」。そして、このような状況に対応していくためには、「個々の教員が個別に教育活動に取り組むのではなく、校長のリーダーシップの下、学校のマネジメントを強化し、組織として教育活動に取り組む体制を創り上げるとともに、組織として教育活動に取り組む体制を創り上げ、必要な指導体制を整備することが必要」とされた。「チーム学校」としての「体制を整備することによって、教職員一人一人が、自らの専門性を発揮するとともに、専門スタッフ等の参画を得て、課題の解決に求められる専門性や経験を補い、子供たちの教育活動を充実していく」と期待される。

学校が抱える課題は、生徒指導上の課題や、特別支援教育の充実などにより、心理や福祉など教育以外の高い専門性が求められるような事案が増

えてきており、教員だけでは対応することが質的な面でも量的な面でも難しくなっている。

また、これまでは外部スタッフ的な位置づけとして関わってきた、スクールカウンセラー(SC)やスクールソーシャルワーカー(SSW)であるが、2017年4月(施行)には、学校教育法施行規則の一部が改訂され、「スクールカウンセラーは学校における児童の心理に関する支援に従事する」「スクールソーシャルワーカーは、学校における児童の福祉に関する支援に従事する」と職務内容が省令で規定され、SCとSSWは学校職員として位置付けられた。法令化により、SCやSSWの常勤化が可能となり、チームの一員として協働することが、より現実的になりつつある。

しかし、現状としての「チーム学校」が、文部科学省の期待に十全に応えるものであるのかについては、まだまだ疑問も残る。谷川ら(2017)は、“そもそも「チーム学校」が事実としてもあるいは学術的な理念としても、わが国で蓄積されてきたとは言い難い”(p.71)とし、チーム学校は“デビュー早々のチームでしかない”(p.71)と述べている。

たとえば杉本(2015)は、“中学2年生の女子生徒1名が授業が終わった直後の放課後15時30分ごろ、校舎の2階から飛び降り自殺を図る。すぐ救急車で病院に搬送され、重症ではあるが命には別状ないとの診断であった”(p.63)という、自らが関わったケースについて、その緊急対応や中期長期にわたるケアのあり方(役割分担や連携の問題)などに関する検討を行っている。

このケースでは、当該中学校に、その年の4月より新しいスクールカウンセラー(30代前半)が赴任(週1日)してきたばかりであり、SCは、学校のスタッフとは“まだほとんどなじみがなかった”(p.63)と報告されている。そして、“学校はマスコミ対応で忙しく、生徒の心のケアに関してはほとんど注意が向かず、ましてスクールカウンセラーに相談することなど誰も考えることはなかった”(p.63)。当該事故の2日後に出勤してきたSCは、そのとき初めて事故のことを知ら

された。翌日には保護者会がセットされていたが、勤務日でもなく出席の要請もなかったため、SCは“そう積極的に関わる問題ではないと思っていた”(p.63)。

このような経緯について杉本(2015)は、“スクールカウンセラーも学校関係者の一員である。ところが他の学校関係者と違って、週1日勤務の非常勤職員であり、その「外部性」を持った専門家ゆえの存在価値があるはずである。この事件が起きたころは、こうした事件のこころのケアがスクールカウンセラーの業務として明確になっていなかった時期である。しかしながら、心理学の専門家の間では、こうした事件・事故後の子どもたちの心のケアは必要なことであることは自明なこととしてすでに受け止めがなされていた。学校側から要請がないにしても、学校関係者の一員として、最初から積極的なかかわりを持つべきであった”(p.67)と振り返っている。

本来、SCなどの心理職は、悩みや問題を抱えた子どもたちへの直接的援助に加え、子どもたちや保護者との問題に対応している教員への援助も行なう存在であるとともに、心理学の立場から子どもたちの発達に関する状況を見立てたり把握したりすることができるなどの専門性を有するサポート資源である(岩瀧・山崎, 2009)。しかしながら、この杉本(2015)のケースにおいては、こうした専門性を活かした関わりが十全になされていたとは言い難いのではないだろうか。

岩瀧・山崎(2009)は、小学校教員24名と、心理職10名を対象として自由記述形式の質問紙調査を実施し、特別支援教育導入に伴い、教員が心理職に期待している役割について明らかにした。その結果、教員が心理職に期待することは、対象児への対応(見守るだけでなく、積極的な対象児への関わり、など)、発達障害の専門性(発達障害の特徴や対応の仕方を教えてほしい、など)、サポート頻度(心理職の勤務時間の増加、できるだけ教室にも介入してほしい、など)、その他(対象児の実態を保護者に伝えてほしい、など)の4つに分類している。一方で、心理職が

教員から期待されていると感じることは、対象児童への対応（学校教育活動への関わり、など）、コンサルテーション（教員へのフォロー、など）、アセスメント（子どもの状態の見立て、など）、具体的な支援スキル提供（対象児への具体的支援、など）、教員サポート（緊急時の対応、など）、その他（専門機関へのリファール、など）の6つに分類された。

さらに、この調査結果をもとに、「心理職に期待する役割尺度（30項目）」を作成した岩瀧・山崎（2009）は、152名の公立小学校教員を対象とした質問紙調査を実施した。因子分析の結果、「専門的なアドバイスをすべきである」「学級担任とのつながりをもつべきである」など、教員とは異なる視点や立場からの情報提示や教員との連携・協働を役割として期待する「教員コンサルテーション因子」、「対象児が授業についてこられるように個別の指示を出すべきである」「授業に積極的に入り、対象児童と関わるべきである」など、授業の行われている教室に直接入り、子どもへのサポート提供をしていくことを期待する「授業補助因子」、「対象児の保護者との面談を担当すべきである」「対象児の保護者に対象児の困難な点を伝えるべきである」など、対象児の保護者に対応をしていく役割を期待する「保護者支援因子」、「対象児を専門家として見立てるべきである」「特別な支援が必要な児童を把握すべきである」など、配慮を要する子どもの査定を期待する「心理査定因子」、「対象児の心のケアをするべきである」「対象児以外の児童のケアをするべきである」など、特別支援教育の対象児童および対象外の児童のサポートを役割として期待する「児童援助因子」の5因子構造が示された。

岩瀧・山崎（2009）の調査は、特別支援教育に焦点を絞ったものであったが、「チーム学校」の運営に際しても、教師が心理職に期待すること、心理職が提供できること、あるいは心理職が提供することを期待されていると認知されていることとのすり合わせは極めて重要であると考えられる。SCやSSWが、外部スタッフ的な位置づ

けではなく、それぞれの専門的な知識または技能を活用しつつ、チームとして連携し、協働して学校運営を行うためには、その専門性に対する認識や信頼を得ることが不可欠である。特に学校現場の主たる担い手である教員が、SCやSSWの専門性をどのように認識しているのかが、チーム学校の運営を左右するものであると言える。

そこで本研究では、現在の中学校において、チーム学校としての運営がどの程度なされているかについて、教員の意識を中心に検討する。特に、臨床心理士であるSCのワークショップの前後における教員の意識の変化に焦点を当て、現状を明らかにすると同時にその変容を促す取り組みについても検討を加える。

## 方法

### 調査対象者

中学校教員17名が調査に参加した。

### 質問紙の構成

本研究で実施した質問紙は、事前質問紙と事後質問紙の2種類であった。

**事前質問紙** 事前質問紙は、5件法の質問項目と、自由記述とによって構成された。調査対象者は、デモグラフィック変数として、性別、教師歴年（5年刻み）、職務内容（管理職・教科専任・クラス担任または副担任・その他）について記入を求められたのち、質問項目として、「チーム学校の知識」、「SC・SSWについての「役割知識」「依頼経験」「支援希望」について、5件法で回答することが求められた。具体的には、「チーム学校という言葉をよく知っている」「チーム学校という概念をよく知っている」「スクールソーシャルワーカーの役割を知っている」「スクールソーシャルワーカーに依頼したことがある」「スクールソーシャルワーカーに支援をしてもらいたいと思うことがある」「スクールカウンセラーの役割をよく知っている」「スクールカウンセラーに依頼したことがある」「スクールカウンセラーに支援をしてもらいたいと思うことがある」の8項目に対

して評定が求められた。

さらに、「日ごろ、教育活動を行うにあたって、生徒、保護者に関わること、またそれ以外のことで困難を感じることはありませんか、どのような時にそう感じるのかを具体的にお書き下さい。また、そのような時にどのようにしたらよいかというお考えがありましたら、それもお書き下さい。」という教示に従い、「どのような時に感じるか」「どうしたらよいかと考えますか」の2項目に対して自由記述にて回答することが求められた。事前調査は、実施される研修会の内容に対してのキャリアプレーションを行うために実施された。

**事後質問紙** 事後質問紙は、研修会后に、「職員研修（教育相談）感想アンケート」として実施された。研修参加者は、氏名の記入を求められた後、「今回の職員研修を受けての感想や意見などお気づきの点ありましたら、ご記入をお願いします」、「次回、教育相談の研修をする際に取り上げてほしいテーマや内容等ありましたら教えてください。」の2項目について、自由記述での記入を求められた。

#### 手続き

本研究は、第二著者がSCとして勤務するA中学校での「研修会」の前後で、研修会の対象者である教員から収集したデータを分析したものである。研修会実施の10日前に、事前調査用紙が配付され、5日前に回収された。これに基づき、研修会が実施され、直後に事後調査が実施された。

研修会の内容は、以下の通りであった。

- (1) スクールカウンセラーとは？チーム学校

とは？というテーマで、事前調査結果を提示し、チーム学校概念、SSW・SCの役割や立ち位置、カウンセリングとはどのような内容なのかを説明し、そして教員・SSW・SCで連携したチーム対応事例の紹介と、要注意の生徒や、配慮の必要な生徒について伝えた。

- (2) 事前調査の中での困難を感じる時、どうしたらよいか、の回答を紹介した。
- (3) 事前調査の中で質問より「学習意欲を起こさせる、学習に向かわせるにはどのようなこえかけをすればよいか」をテーマに3つに分かれて、グループ討議を行い、発表をしてもらい、最後にまとめを行った。

#### 結果と考察

##### 事前調査の分析

**記述統計** まず、事前調査の5件法で回答を求めた項目について、平均値および標準偏差を算出した結果を表1に示した。この結果から、現場の教員は、チーム学校について、言葉としては知っているが、その概念についてはあまり知らないと感じていることが見て取れる。また、概してSSWに対するよりSCに対する役割知識や依頼経験が高いことが示される一方、支援希望に対しては、SSWとSCとでそれほど差異が認められないことは興味深い。

表1 事前調査の各項目における平均値および標準偏差 (Max=5)

項目	M	SD
チーム学校という言葉をよく知っている	3.2	1.4
チーム学校という概念をよく知っている	2.7	1.3
スクールソーシャルワーカーの役割を知っていることがある (SSW役割知識)	2.9	1.3
スクールソーシャルワーカーに依頼したことがある (SSW依頼経験)	2.9	1.6
スクールソーシャルワーカーに支援をしてもらいたいと思うことがある (SSW支援希望)	3.8	1.3
スクールカウンセラーの役割をよく知っている (SC役割知識)	3.9	0.6
スクールカウンセラーに依頼したことがある (SC依頼経験)	3.8	1.5
スクールカウンセラーに支援をしてもらいたいと思う (SC支援希望)	3.8	1.2

**相関分析** 次に、これらの項目について Pearson の積率相関係数を算出した結果を表 2 に示した。相関行列からは、SC あるいは SSW に支援依頼を行ったことのある教員は、支援希望が高いことが示された。また、役割に対して知識を持っている教員は、支援希望が高いことも示された。もちろん、この結果は相関分析に基づくものであり、支援希望が高い教員が、実際に支援依頼を行ったということを示しているとも考えられる。さらに、チーム学校についての知識と SSW の役割知識とは有意な相関が認められたが、SC の役割知識との間には有意な相関は認められなかった。

**SC や SSW に対するイメージ** SC のイメージを問う自由記述からは、「子どもに寄り添う、共感する、立ち直る力が湧きおこるような支援を行う。」や「生徒に寄り添ってもらえる。」「生徒や保護者の気持ちに寄り添いながらも、冷静に分析し、少しでもよい方向に導くことができる。」「心の専門家として、教師とは違う立場で子どもたちの抱えているものに寄り添ってくれる存在。」といったように、「子ども」に「寄り添う」というキーワードが散見された。

また、「いろんな話を聞いてもらえる。」「とにかく思いを聴いてくれる。」「本人や保護者の話を聞いて寄り添ってもらえる存在」「傾聴、心の居場所」「生徒も親も、教師には言えないことを相談できる（引き出して頂ける。）」のように、「きく」イメージについても多く認められた。

一方で、SSW については、「ケースに応じて、関係機関との連携が必要な場合、その橋渡しの役割をしてくれる。」「社会制度へのつなぎ役、保護者も含めた家庭への援助役。」といったように、一定の役割認識がされていると思われる回答もあるものの、「わからない。」「SSW について、全く知識がない。」「どういう支援の仕方があるのか、どういったケースの場合に対応してもらえるのか、いまいち理解できていない。」「初めて接したということもあって、SSW については今はよくわからない。」「どのような支援をしてもらえるのか、どのような子どもがあてはまるのか、十分な理解ができていない。」「SC と SSW が同じに思ってしまう。」といった、具体的なイメージを持っていない教師が多いことが目立った。

#### 事後調査の分析

事後調査の自由記述においては、「スクールカウンセラーとソーシャルワーカーの違いもしっかり理解できました。」「スクールカウンセラーの仕事内容が再認識できた。チーム学校としての対応、教員、SC、SSW の立ち位置も再認識でき、活用していくことが子ども、保護者にとってもより良い方向になっていくことが理解できた。」「SSW・SC の役割をきっちり説明してもらえたので、自分の中で区別が出来ました。」等の意見が見られ、それまで曖昧であった SC や SSW の「違い」について、研修の結果、理解が進んだことが示された。一方で、「スクールカウンセラーとスクールソーシャルワーカー、教職員地域が一体になれ

表 2 事前調査の各項目間の相関行列

	チーム学校 言葉	チーム学校 概念	SSW 役割知識	SSW 依頼経験	SSW 支援希望	SC 役割知識	SC 依頼経験	SC 支援希望
チーム学校言葉	—	.827 **	.769 **	.148	.198	.409	.175	.134
チーム学校概念		—	.797 **	.185	.347	.350	.151	.159
SSW 役割知識			—	.288	.528 *	.392	.341	.383
SSW 依頼経験				—	.716 **	.615 *	.237	.509
SSW 支援希望					—	.659 **	.611 *	.874 **
SC 役割知識						—	.584 *	.644 **
SC 依頼経験							—	.840 **
SC 支援希望								—

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

るのが言葉では簡単ですが、実現はすごく長期的、計画的な実践が必要だと思います。」「教員が成長を促す + 心理的な関わり + 親のしつけ的な部分 全てをしている気がします。正直、立ち位置が難しく困っています。」といった関わりや役割分担の困難さを認識していると窺わせる回答もあった。

沢崎ら(2016)は、日本カウンセリング学会資格検討委員会の委員会報告、「カウンセリング心理士の資格をめぐる」の中で、「カウンセリング心理学に基づくスクールカウンセラーの行う介入は、カウンセリングだけでなく、ガイダンス、トレーニング、コンサルテーション、アウトリーチ、心理教育などの手立てを用いて児童生徒や保護者のニーズに応えようとする、多様性に富むものになる。具体的には、課題を抱えた児童生徒への個別支援はもとより、教職員や他の専門家と協働しながら、自己理解や人間関係づくりの促進をめざすプログラム開発を行ったり、コミュニケーションの活性化をめざす集団的アプローチに取り組んだり、学校行事などで良質な人間関係を体験する機会をつくりだしたりすることを目指すものになる」(p.114)としている。今回、第二著者が行ったような研修会の取り組みは、全体的なコンサルテーションに当たるものであると考えられ、チーム学校が機能していくためには、こうした取り組みも有効であると考えられる。谷島(2017)は、スクールカウンセラーの基本的な活動の一つである学校コンサルテーションについて、教師の学校コンサルテーション有効感に影響を及ぼす要因を探索的に明らかにするために、教師の属性として、性別、年代、教師経験年数、担任かどうか、およびコンサルタントの属性である性別と年代を独立変数、学校コンサルテーション有効感を従属変数として数量化I類を用いて検討を行っている。その結果、教師の性別と年代が学校コンサルテーション有効感に影響を及ぼすことが示された。具体的には、教師の性別が女性であることや、教師の年代が20代であることが大きく影響していた。こうしたことも踏まえて、有効なコンサルテ-

ションを模索しながら、チーム学校概念あるいはSCやSSWの専門性を教師の間に根付かせていくことが求められる。

## 引用文献

- 岩瀧大樹・山崎洋史(2009). 特別支援教育導入における教員の意識研究 - 期待される心理職の役割. 東京海洋大学研究報告, **5**, 17-27.
- 加藤博己(2014). 小学校においてスクールカウンセラー(学校臨床心理士)が果たす役割. 駒澤大学心理学論集, **16**, 23-28.
- 前田洋一・猪尻マサヨ(2016). 学校をチームにするには何が必要か 学び続ける教員集団を形成するための実践的研究. 鳴門教育大学学校教育研究紀要, **30**, 19-28.
- 文部科学省中央教育審議会(2015). チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について(答申) 中教審第185号  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365657.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365657.htm)(2017年12月15日)
- 大野精一(1998). 教育心理学と実践活動 学校教育相談の定義について 教育心理学年報, **37**, 153-159.
- 沢崎達夫・小林正幸・新井肇・藤生英行・平木典子・岩壁茂・小澤康司・山崎久美子(2016). カウンセリング心理士の資格をめぐる ― 資格検討委員会報告 ―. カウンセリング研究, **49**, 108-122.
- 杉本好行(2015). 学校教育相談におけるスクールカウンセラーの新たな役割―事件・事故等の子どもの心のケアを中心に―. 常葉大学研究紀要(教育学部), **35**, 59-71.
- 高木悠哉(2018). 保育者・教員養成課程に求められる科目「教育相談」に関する現状と課題. 人間教育(奈良学園大学人間教育学部), **1**, 87-96.
- 谷川至孝・鈴木麻里子・平阪美穂(2017). 「チーム学校」の研究動向と今後の研究への提言.

教育行財政研究, 44, 71-81.

谷島弘仁 (2017). 教師の学校コンサルテーション  
有効感の認知に影響を及ぼす質的要因に関  
する検討: 数量化I類による検討. 生活科  
学研究, 39, 61-67.